

修道士は告解で山羊の司教に屈して種
を残される

2026

•

9

•

26

目次

第
01
話

第
02
話

第01話

黎の声を初めて聞いたのは、三年前の春だった。

朝のミサで彼が最初の一句を唱えたとき、堂の奥で咳きこんでいた老人がぴたりと黙った。私も息を止めた。それから毎朝、私は信徒席の端で燭台の番をしながら、祭壇の彼を見ている。

「透、左の三本目が消えてるぞ」

年長の修平さんに肘でつつかれ、私は慌てて火を移した。

祭壇では黎が、白い法衣の袖を直していた。細い首、伏せたまつげ。唱え手に選ばれてから、彼は一度も声を外したことがない。

コツ、コツ、と石の床を打つ音がした。

蹄の音だ。信徒たちが一斉に背すじを伸ばす。

司教の剛史様が入ってきた。

山羊の獣人だ。額から後ろへ反り返った二本の角が、ろうそくの光を切る。横に長い瞳孔の目が、堂じゅうをいっぺんに見渡した。背は人間の男より頭ひとつ高く、赤い司教服の肩が厚い。

秋の終わりが近づくと、司教様のまわりには独特の匂いが立つ。干し草と獣脂を煮つめたような、重くて甘い匂いだ。山羊の雄の、

繁殖期の匂いだと言長たちは小声で言う。信徒は気づかないふりをする。

「始めよう」

低い声が落ちて、ミサが始まった。

黎の唱えは、今日も澄んでいた。

澄んでいたのに、三句目の途中で、彼の指が念珠を強く握りしめたのが見えた。司教様が祭壇へ上がり、黎の真後ろに立った瞬間だった。

黎の首すじが赤い。

匂いのせいだ、と私は思った。あの匂いはきつい。

ミサが終わり、信徒が帰っていく。私は燭台の火を消して回った。祭壇裏の聖具室から、司教様の声がした。

「黎。こっちへ」

「はい、司教様」

扉は半分開いていた。私は燭台を抱えたまま、足を止めた。

「今朝、三句目で声が揺れたな」

「申し訳ありません。香の煙が喉に」

「煙か」

司教様は黎の前に立ち、ゆっくりと顔を寄せた。黒い鼻が、黎の首すじから胸へ、法衣の上をたどって下りていく。へその下あたり

で止まり、上唇がめくれ上がった。歯ぐきがむき出しになるほど深く、匂いを吸いこんでいる。

黎が一步下がった。背中が聖具棚に当たる。

「司教様、何を」

「嘘をつくな。お前の体から、雌の匂いをする」

黎の顔から血の気が引いた。

私は知らなかった。院の誰も知らなかったはずだ。

「入院のときの検めで、俺だけは見ている。体はほとんど男なのに、へその下だけ女のつくりになっている。そうだな」

「……主が与えた体です。恥じるものでは」

「恥じろとは言っていない」

司教様の手が、法衣の上から黎の股に当てられた。大きな手のひらが、そこを包むように押す。

「あっ」

「濡れている。俺の匂いを嗅いで、ミサのあいだじゅう、ここを濡らしていたんだろう」

「ちが、います」

「布の上からでも分かる」

親指が、布ごとぐっと沈んだ。割れ目をなぞるように、ゆっくり上下する。黎の腰が跳ね、念珠が床に落ちて散らばった。

「や、めて、ください……っ」

「今日の告解の当番、お前にする。夕方の五時だ」

「告解は、年長の方の務めで」

「俺が決めた」

司教様は手を離すと、落ちた念珠をひとつ拾い、黎の手に握らせた。

「来なければ、この体のことを院じゅうに話す。唱え手がどんな体をしているか、信徒も知りたがるだろう」

黎は念珠を握ったまま、何も言わなかった。

蹄の音がこちらへ来る。私は燭台を抱えて柱の陰に隠れた。司教様は私の前を通りすぎ、足を止めずに言った。

「透。お前は告解室の見張りだ。五時から、誰も近づけるな」
見られていた。

「……はい」

聖具室をのぞくと、黎は床にしゃがんで、散らばった念珠の珠を拾っていた。指が震えて、うまくつまめない。

「手伝うよ」

「来るな」

初めて聞く、とがった声だった。

「……見てたのか」

「少しだけ」

黎は珠を握りこんだ。法衣の股のところに、小さな濃い染みがあった。彼はそれを手で隠した。

「忘れろ、透」

忘れられるはずがなかった。

三年間、私はあの声を聞いてきた。その声が、たった今、司教様の親指ひとつで裏返ったのを聞いてしまった。

自分の股が熱くなっているのに気づいて、私は燭台を強く抱えなおした。

第02話

五時の鐘が鳴る前に、私は告解室の前に立っていた。

西の回廊のいちばん奥。木の小部屋がふたつ並び、あいだを鉄の格子が仕切っている。信徒が入る側と、司教が聞く側。黎は信徒側の扉の前で、両手を組んで待っていた。

「本当に来たんだな」

「来なければ、話すと言われた」

「俺が年長に言えば」

「言つてどうなる。司教様の言葉と、俺の体と。院はどつちを信じる」

黎は私を見なかった。

蹄の音。

司教様は聞く側の扉に手をかけ、黎に顎で示した。

「入れ。格子の前で跪け」

ふたつの扉が閉まった。

私は扉の前に立った。見張りだ。誰も近づけるな、と言われた。

信徒側の扉の板には、節が抜けた小さな穴がある。私は知っていた。見習いのころ、ここに隠れて昼寝をした。

穴に目を当てた。

薄暗い小部屋。黎が膝をついている。顔の高さに、鉄の格子。格子の向こうで衣ずれの音がして、司教様が立ち上がった。

格子の下段、信徒が紙を差し入れるための細い隙間から、それが突き出された。

赤黒いちんぽだった。

人間のものより細くて長い。先がずっと尖って、根もとに向かうほど太くなる。筋が浮き、濡れた先から透明な汁が糸を引いている。あの匂いが、扉の穴を通して私のところまで届いた。

「……っ」

黎が顔をそむけた。

「告解を始めろ。お前の罪は何だ」

「……罪、は」

「俺の匂いで股を濡らしたことだ。口で償え」

「できません」

「なら院じゅうに話す」

長い沈黙のあと、黎の唇が、尖った先に触れた。

「舌を出せ。裏をなめろ」

ぴちゃ、と小さな音。黎の舌が、ためらいながら裏筋を下から上へなぞる。

「もつと深く。唱えるときの喉を使え」

「んぐ……っ、う」

細い先が、黎の口の奥へ滑りこんでいく。長いから、どこまでも入る。黎の喉がごとりと動き、目尻に涙がたまった。

「そうだ。その喉だ。毎朝、信徒が拝んでいる喉だ」

じゅぷ、じゅぷ、と音が大きくなる。格子がきしむ。黎の手が床をつかみ、指の関節が白くなっている。

私は穴から目を離せなかった。

吐き気がした。それでも、目は離れなかった。

足音がした。

振り向くと、修平さんが回廊の角を曲がってくる。

「透、黎を見なかったか。晩の唱えの打ち合わせをしたいんだが」

「告解の当番です。司教様と」

「告解、あいつが」

「司教様のご指名で」

修平さんは扉を見た。中から、かすかに湿った音が漏れている。

私はわざと大きく咳をした。

「……風邪か」

「少し」

「司教様のご指名なら仕方ない。終わったら俺の部屋に来るよう伝えてくれ」

足音が遠ざかった。

私は、黎を助けなかった。

声を上げれば、修平さんは扉を開けただろう。開けなかったのは黎の秘密を守るためだと、自分に言い聞かせた。本当は、続きが見たかった。

穴に目を戻すと、ちんぽは格子の向こうへ引き抜かれていた。黎は床に手について咳きこみ、口のはしから唾と先走りが垂れていた。

ふたつの部屋をつなぐ内扉が開いた。司教しか開けられない扉だ。

司教様が、信徒側に入ってきた。狭い部屋が、角と肩でいっぱいになる。

「立て。壁に背をつけろ」

「司教様、もう、償いは」

「まだだ。お前の本当の罪は、ここにある」

司教様は膝をつき、黎の法衣の裾を腰までまくり上げた。

下着は、もうびしょ濡れだった。司教様がそれを横にずらす。

へその下。本来なら男のものがあるはずの場所に、ぷつくりと膨らんだ小さな割れ目があった。上の端に、皮をかぶった小さなクリが尖っている。割れ目は充血して、とろとろのまん汁で光っていた。

「口でしゃぶりながら、ここをこんなに濡らしていたのか」

「見ないで、ください……」

「見るだけじゃない」

司教様の口が開き、舌が出た。

長い。人の舌の倍はある。ざらついた山羊の舌が、割れ目を下から上へ、ずるりとひとなめした。

「ひあっ」

黎の背中が壁に当たって、ごん、と鳴った。

「声を落とせ。外に透がいる」

名を呼ばれて、私は穴から飛びのきそうになった。

「透……いやだ、見ないで、透……っ」

司教様は答えず、舌を割れ目の奥へ押しこんだ。長い舌が、まだ誰も入ったことのない中を、ぐちゅぐちゅとかき回す。ざらざらの表面がクリをこすり上げる。

「あっ、あ、だめ、なか、舌、はいつて……っ」

「処女のまんこは、舌だけで痙攣するのか」

「ちが、あつ、そこ、クリ、こすらな、いで……」

黎の太ももが、司教様の角をはさむように閉じた。閉じたまま、
がくがくと震えた。

「いつ、く……っ、いく、いつちや、ああ……っ」

割れ目からぷしゅっと汁が飛び、司教様の鼻先を濡らした。

司教様は顔を上げ、濡れた口もとを指でぬぐった。

「罪を認めたな」

黎は壁をずり落ち、床にへたりこんだ。息が乱れて、声にならな
い。

「続きは、今からだ」

司教様が司教服の前を開いた。さつきより太く張りつめたちんぽが、黎の顔の前で揺れた。

ほかの作品はサークルページから

https://www.dlsite.com/bl/circle/profile/=maker_id/RG01071549.html

奥付

作品名 修道士は告解で山羊の司教に屈して種を残される

サークル もふもふといっしょ！

発行日 2026・9・26

レーティング R18